

フィリピン・マクタン島コルドヴァにおける 農産物の流通に関する調査報告

辻 貴志*

1. はじめに

1-1. 本稿の目的

フィリピン・マクタン島は、フィリピン中部ビサヤ地域のセブ州に位置する。マクタン島は、サンゴ礁域に恵まれ、漁撈が盛んに行われている。マクタン島を含むビサヤ地域では、その多島海という生態環境のもと、多様な漁撈技術が発展してきた (Umali 1950)。漁撈技術の発展は、内海だけでなく外洋でも漁撈を行える漁民の移動性を発達させた (関 2007)。海を基盤とするビサヤ漁民に関する研究は精力的に行われてきた (Ushijima and Zayas 1994, 1996, 2004, Zayas et al. 2014)。Ushijima と Zayas が中心となった論集には、ビサヤ漁民の漁撈だけでなく、文化、社会、経済、ジェンダーなど多様なアプローチからの論文が収録されている。中には、本稿が対象とするビサヤ地域の市場や商店舗を扱った論文も確認できる (Kawada 1994, Ogawa 1996, Kobayashi 2000)。

ここで本稿に関連する先行研究を概観しておきたい。Ogawa (1996) は、東サマル州のビクトリー島で多く確認できるサリサリ・ストア (Sari-Sari Store) という小規模な商店舗について、考現学の視点から物質 (商品) に着目した調査を行った。定点的観測により、すべての商品、仕入れ値、売り値、利益などがほぼ完全に記載されている。時間ごとの店の利用者と売買行動も綿密な観察記録が見られる。しかし、調査対象が1店舗のみであり、似たり寄ったりの傾向にあるとも言えるかも知れないが、ほかの店舗の個性や売買戦略について知ることができず全体像の把握には至っていない。

Kobayashi (2000) は、パナイ島北西部イビサン町の公設市場の鮮魚売りの生計の不安定さについて、漁民の水揚げに大きく頼らざるを得ない脆弱性に問題があるとし、鮮魚売りの生計の危機対応に関する調査を行った。本論文は、鮮魚の供給者と売り子の売買をめぐる相

互交渉、売り子と利用客のかけひきの際に用いられる呼び名に着目した会話分析を主に構成されている。鮮魚の売り子は商品の見せ方と客引きも大事だが、鮮魚の供給者やスキ (suki) との人間関係や天候など鮮魚の入手を左右する出来事も重要である。鮮魚売りは、鮮魚の売買について困難に陥ると、取引相手に懇願する程度のネガティブな戦略しかとれない状況にあることが明らかにされた。市場での鮮魚売りの人間関係の人間臭さは伝わるものの、鮮魚売りの商品や生活の背景が見えてこない。

Kawada (1994) は、セブ州バンタヤン島の公設市場におけるスキ関係に着目し、社会におけるスキの重要性について考察している。公設市場における売り子の社会経済状況が質問紙調査によって具体的に示されているほか、売買時の会話分析により商品には様々な人びとが関わっていることを明らかにしている。そして、スキ関係は公平でないが、市場で商品を売買するだけでなく、社会生活を営む上でも必要不可欠であると指摘している。本論文は、売り子は誰もがスキを持っているものだとすることを指摘し、売り子の社会経済状況と基盤の解明をする上で示唆に富む。しかし、市場全体の要点は押さえられているが、商品と売買のバラエティーについて記述が及んでいない。

Szanton (1971) は、パナイ島エスタンシアの鮮魚の卸売り業者と漁民の相互関係について詳細に分析している。卸売り業者は漁民が必要とする金品を貸し与えることで、市場価格より安い価格で漁民から鮮魚を有利に買い取ることができるなど、卸売り業者が漁民より優位な立場にあることを明らかにしている。卸売り業者は恒常的に鮮魚を入手する必要がある、漁民をつなぎとめるため、時には漁民の借金を帳消しにすることもあるが、自身が損をしない構造を構築している。本書はスキ関係のシステムをはじめ経済状況の解明に優れた民族誌であるが、市場の生態に関する記述に欠ける。

* 佐賀大学大学院農学研究科特定研究員・岡山理科大学非常勤講師

Spoehr (1980) は、ビサヤ地域の鮮魚卸売市場について記述している。鮮魚卸売市場はビサヤ地方の流通と漁撈の近代化と結びついているだけでなく、人のネットワークが織り混ざっている。鮮魚卸売市場に関する民族誌的資料が少ない中、本書の位置づけは重要である。しかし、市場の構造や商品に関する記述は少なく、もっぱらスキ関係など人間関係に焦点が当てられている。市場でのスキ関係は売買の損失を避け、経済的な不確実性に対応する手段であることが示されている。

Davis (1973) は、ルソン島マウンテン・プロビンス州のパギオ市の公設市場の機能について、交換の場、情報交換、購買力のない層に対する販売単位の縮小、信用貸し、中国人に対する団結、貧困層でも商売に参入可能、といった要素を挙げている。市場での商売は、政治的な力学に翻弄されることにも触れられている。市場での売買には、生産者、売り子、露天商、運搬業者、仲買人などが絡み、リスクを軽減するためにスキ関係が構築され、売買と人間関係が良い方向に進展するよう社会が構造化されていることが解明されている。本書は市場の機能、制度、スキ関係について焦点が当てられており、市場の基層を理解する上で貴重な資料であるが、市場のモノの多様性や人のにぎわいについて読み取ることができない。

以上、先行研究では、市場の生態に触れつつも、売買行動における人間関係が中心的な研究対象となっている。特に、スキ関係に見られる人びとの相互関係と、経済的な問題に対する対応に関心が向かっている。市場の全体像や活気を記述として表すことこそ、市場研究の重要課題であると著者は考える。また、Davis が報告した、市場はモノや情報の交換の場であるだけでなく、購買力のない層に対する販売単位の縮小、貧困層でも商売に参入可能という点などが、市場の社会的役割の大きな一部であると考えられる。特に、購買力のない層に対する販売単位の縮小について、フィリピン各地で普通に確認され、もちろん売り子の利益を損することはほとんどないのだが、底辺層の人びとの生計にとって役立つ対応として機能している。市場の構造は複合的であり、人・モノ・情報の交換の場として動態的側面が複雑であることから、体系的な研究は容易ではない。先行研究だけでなく、本稿においてもそれらの課題は十分に克服できていない。

本稿は、マクタン島のコルドヴァ公設市場の農産物売りに着目した予備的調査に基づく。公設市場について、上記の先行研究と重複する点が少ないが、農産物売りを対象にし、かつ農産物の不足と流通に焦点を当てている点で先行研究とは異なる。特に、農産物不足による

栄養的側面に関する記述および考察は先行研究には見られない。本稿の目的は、コルドヴァ公設市場の動態的側面、つまり人とモノの状態と動きを明らかにすることであり、その一端として農産物売りに着目した。農産物はマクタン島では生態的に自給が困難であり、他地域から運ばれてくる。農産物がどこからどのように運ばれてくるかという問題の解明が、本稿の第1の目的である。市場に農産物は並ぶものの、著者が調査の拠点とするスラム地区K集落の貧しい層の人びとなどにとって、値段が高く、入手しづらい。どのように彼らは農産物入手しているのか、あるいは農産物に代わるものを摂取しているのかについて明らかにすることが第2の目的である。K集落の人びとの食生活は、特別の機会を除き、農産物で満たされることはない。人びとは市場を利用するものの、農産物の購買行動は最低限に手控えられる。そのことを明らかにするための食事調査が第3の目的である。以上、市場での農産物と農産物売りに焦点を当てることで、農産物をめぐる市場の状況を記述し、市場に近接する地域の人びとの農産物との接点について社会経済状況、生態環境状況、栄養状況から解明する。

1-2. 調査地の概要

調査地であるコルドヴァは、マクタン島南部に位置する(図1)。コルドヴァは、採石、観光、サービス業(小規模な商店、乗り合い自転車、公設市場など)、沿岸域浅瀬と干潟での漁撈が主な生業である。特に、漁撈に従事する人口が多く、約35%の世帯が漁撈従事者を抱える(Municipality of Cordova 2014)。漁撈に関して、コルドヴァはウツボの産地として有名であり(辻2007a, Tsuji 2013)、毎年8月にはDinagat-Bakasi Festival(海・ウツボ祭り)が開催され地域の一大イベントとなっている(写真1)。コルドヴァは、マクタン島内のMactan Export Processing Zone(MEPZ)(以下、マクタン輸出加工特区)から約4kmの距離にあり、主に高卒以上の人びとは特区内の外資系工場に職を求め、最近(2012年)のコルドヴァの人口は53,322人であり、マクタン輸出加工特区の雇用者のベッドタウンとして年々人口が増加している(Municipality of Cordova 2014)。国内外の観光客の増加と商業の近代化も進んでいる。海辺の観光客向けレストランやリゾートホテルでは、韓国人をはじめ多くの観光客が確認できる。観光客向けレストランでは、2014年頃から、地元の漁民が漁獲するウツボや貝(クモガイ)がメニューに上るようになってきている(辻2015)。世界的大手コンビニエンス・ストアやフィリピンの有名大型スーパーも2014年から2015年にかけて営業を開始した。

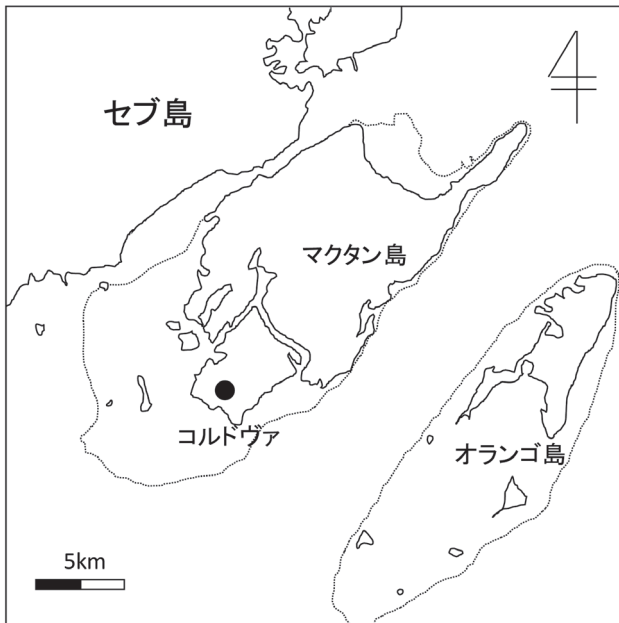


図1 調査地の位置
(Municipality of Cordova 2014 をもとに作成)

1-3. 調査の概要

本稿に関するフィールドワークは、1) 2014年9月6日から9月14日、2) 2015年3月17日から4月4日、3) 2015年7月31日から8月29日の3回にかけて実施した。本稿の内容は、主に3)の調査に依っている。調査地のコルドヴァでは、スラム地区とされるK集落(65世帯351人)の漁民世帯に滞在した。そこから公設市場へは徒歩で1分ほどの距離である。調査は、公設市場の様子の把握と記述、農産物の売買の状況、仕入れ値と売り値、仕入れの方法のほか、K集落の人びとの農産物の購買・摂取状況など人びとと農産物との関係性に着目し、参与観察、個体追跡、インタビューなど調査を行った。本稿で言うところの「農産物」とは、野菜、果物、穀類の総称とし、本文中で統一を試みたが、記述の都合、分けて取り上げている部分もあることを断っておきたい。魚介類と精肉類などほかの商品についてもデータを得たが、全体として議論するには不十分であり、別稿で取り上げることにしたい。公設市場の農産物の売り子が農産物を遠方に仕入れに行く際、乗り合いのジープニー(Jeepney)と呼ばれる乗り物に同乗し、仕入れルート GPS で記録し、人びとの行動を記録した。マクタン島はビサヤ(セブアノ)語圏であるが、調査はタガログ語で行った。1)と2)の調査は帯広畜産大学の平田昌弘氏と共同で行った。本稿の内容の一部に平田氏の取得したデータを引用したが、文責は一切著者にある。

2. コルドヴァの農産物不足をめぐる諸側面

2-1. 生態的側面

マクタン島は石灰岩土壌であり、農耕に適さない(写真2)。よって、農耕用のスイギュウが確認できない。米は石灰岩質のマクタン島では栽培されてこなかったと言われる。島内のバサックという地域では、1990年代あたりまで米が栽培されていたという。バサック(Basak)は湿地帯という地名であり、ビサヤ語およびタガログ語のbasa?「濡れた」に由来すると思われる。バサックはマクタン輸出加工特区の発展に伴う宅地造成のため、水田が消えたと推察できる。スペイン統治期の歴史資料からは、セブ州は農耕地が30%に過ぎず、土の質が悪く、穴ぼこだらけの石灰岩であったことが伺える(Fenner 1985)。また、米ではなく、乾燥に強いキビとトウモロコシが主要作物であったことが記録されている(Scott 1992)。考古学的資料からも、セブ州は海産資源への依存度が他地域に比べきわめて高かったことが推測されている(Galong 2013)。統計資料もまた、セブ州(21.1%)が、周辺の東ネグロス州(42.3%)、ボホール州(33.4%)、シキホール州(32.4%)より耕作可能面積が小さいことを示している(National Statistics Office 2004, 2006)。よって、マクタン島をはじめとするセブ州では生態環境的に農耕の余地が少ないと認識されている。コルドヴァでは一部の篤農家が見栄えの良い菜園を維持しているが、大多数は家の脇などでごく小規模な家庭菜園を営んでいる程度である。農産物は自給ベースでも、商業ベースでもコルドヴァで生産されることは、マクタン島の広域視察調査の結果からもほぼ無きに等しいと言える。

農産物は、セブ島では、フィリピン国内や外国産、そしてセブ島山地部から、セブ島最大の農産物市場であるカルボン市場などに集積される。そして、複数のネットワークを介して、コルドヴァに運ばれてくる。セブ島の農産物の産地として代表的な地域に島南部のマントロンゴン(Mantalongon)が挙げられる。マントロンゴンでは、山地部から120kgほどの農産物の入ったバスケットを背負って降りてくる勇壮な男たちの姿が見られる(写真3)。カルボン市場で売られている農産物の多くは、マントロンゴンなどセブ島山地部産である。カルボン市場で農産物を買う人びとは、農産物の産地の出身者が多く、彼らは産地から親族が輸送する農産物を市場で売る。カルボン市場で農産物を買う人びとはセブ市に居住し、産地とのネットワークが形成されている。直接現地から農産物を買りにくるといふ人も確認された。マントロンゴンをはじめ山地部は気候が冷涼であり、農産物の栽培

に適している。コルドヴァの海拔は 10 m 以下、気温は 18.3 ~ 35℃ (Municipality of Cordova 2014) であるのに対し、マンタロンゴンでは海拔 1,000 m、気温 15 ~ 18℃ほどである。マンタロンゴンの土壌もまた石灰岩土壌であり、表土はコルドヴァよりやや多い印象を受ける (写真 4)。農産物がよく実るのは、冷涼な気候、肥料、農耕技術などが関係していると考えられる。コルドヴァではこれらの要素が欠けている。

コルドヴァの公設市場で確認できる農産物は、主に遠方の山地部から時間と手間をかけてセブ島の中心地に運ばれてきたものを、公設市場の農産物の売り子が労力をかけて仕入れてくるものである。産地からの具体的な流通のプロセスや物価を比較できる資料はないが、流通の過程で農産物の値段が跳ね上がっているのは確かである。なお、役場の資料に「毎週金曜日と土曜日にセブ市山地部の野菜・果物の商人がコルドヴァに商品を売りにくる」(Municipality of Cordova 2014) という記述があるが、聞き取りと目視の結果、確認には至らなかった。スキなどの人間関係を介して農産物を外部から注文している可能性もあるが、調査では確認できなかった。

2-2. 社会的側面

農産物が欠如している生態環境への対応として、人びとはスペイン統治期あるいはそれ以前からあった、キャッサバ、トウモロコシ、タロ、ワサビノキ、バナナ、マンゴー、ココヤシ、グアバ、ジャカトウ、パンノキ、ゴレンシを利用している、と町役場の報告にある (Municipality of Cordova 2014)。K 集落内の自生・半栽培 (栽培種を含む) の植物をリストアップしてみたところ (表 1)、20 種類の植物を確認した。前出の町役場の報告には 11 種類の植物が挙げられているが、K 集落で確認できなかったのはトウモロコシとパンノキである。ほぼ町役場の記載どおりの植物が、基本作物として認識されているとみてよからう。もちろん、トウモロコシとパンノキはコルドヴァ内で普通に確認できる。K 集落内では、タマリンドが最も確認できたが、これは酸味のあるスープを作るのに必須である。次いで、ココヤシが多いが、こちらも調理用のココナツミルクを得るのに重要である。バナナは果物としてだけでなく、蒸したり揚げたりしたものを主食としても利用する。マンゴーも果物としてだけでなく、熟していないものは酸味のあるスープを作るのに用いられる。これらリストの上位の植物をはじめ身近な自生・半栽培の植物を、人びとは農産物の栄養的欠落を補うべく利用していると考えられる。なお、栽培の要素の強いトウガラシ、ナス、タマネギ、オクラも含まれている。本リストで興味深いのは、タロ

表 1 K 集落で確認された自生・反栽培植物 (著者作成)

	和名	学名	方名	地点数
1	タマリンド	<i>Tamarindus indica</i>	sampalok	6
2	ココヤシ	<i>Cocos nucifera</i>	niyog	4
3	バナナ (ガルダヴァ種)	<i>Musa sp.</i>	saging	3
4	マンゴー	<i>Mangifera indica</i>	mangga	3
5	グアバ	<i>Psidium guajava</i>	bayabas	2
6	トウガラシ	<i>Capsicum annuum</i>	sili	2
7	フトモモ科の一種	<i>Syzygium fischeri</i>	tambis	2
8	ミカン科	<i>Triphasia trifolia</i>	limonsito	1
9	パラミツ	<i>Artocarpus heterophyllus</i>	nangka	1
10	キャッサバ	<i>Manihot esculenta</i>	kamoteng kahoy	1
11	ジャカトウ	<i>Annona squamosa</i>	atis	1
12	タロ	<i>Colocasia esculenta</i>	gabi	1
13	ワサビノキ	<i>Moringa oleifera</i>	malunggay	1
14	オクラ	<i>Abelmoschus esculentus</i>	okra	1
15	ツルムラサキ	<i>Basella alba</i>	halobati	1
16	ナス	<i>Solanum melongena</i>	talon	1
17	パパイヤ	<i>Carica papaya</i>	papaya	1
18	タマネギ	<i>Allium cepa</i>	sibuyas	1
19	ゴレンシ	<i>Chrysophyllum cainito</i>	kaimito	1
20	サボジラ	<i>Manilkara zapota</i>	chikos	1

やツルムラサキといった人類の太平洋への拡散とともにあった古い植物に、人びとが今もなお依存していることである。植物にはスペインなどによる植民地経験も読み取ることができる。本稿で、重要な位置づけにあるのはワサビノキである。若い葉っぱを野菜として利用する。ハウレンソウの 4 倍近いビタミン C、タンパク質、カルシウム、鉄分に富む (Quisumbing 1978、吉田・菊池 2001)。ワサビノキは土壌の質の悪さや干ばつの影響をほとんど受けずに速く生育する (Brown 1921)。最近、日本でも健康食品として注目されている。ワサビノキは日常的に食卓に上る。特に、スープの具材となる (写真 5)。農産物の利用に乏しい人びとが繁くこの植物の葉っぱを利用することは、古くからその栄養的側面を見抜いてきたからであろう。人びとはワサビノキにこれほどの栄養があるとは語らないが、在来の慣習で利用していると考えられる。ワサビノキは自生 (インド北部原産) であり、地域によっては自由に採取しているが、K 集落では所有者がおり、断りを入れてから採取するか、代金を支払う。公設市場では、ワサビノキは 1 束 10 ペソほどで売られている (写真 6)。

2-3. 経済的側面

コルドヴァでは、40.7%の世帯が貧困層である。非雇用率は 38%である。推定の世帯年収 60,000 ペソ以下の世帯が 27%、60,000 ~ 120,000 ペソの世帯が 35%を占める。残りの 38%を 120,000 ペソ以上の世帯が占める。平均年収は 156,444 ペソであり、平均的な家族

表2 K集落の46世帯を対象とした世帯人数と世帯数

(簡易質問紙により著者作成)

世帯人数	世帯数	世帯人数合計
9	1 (2.2%)	9 (4.1%)
8	2 (4.3%)	16 (7.2%)
7	7 (15.2%)	49 (22.1%)
6	8 (17.4%)	48 (21.6%)
5	8 (17.4%)	40 (18.0%)
4	8 (17.4%)	32 (14.4%)
3	4 (8.7%)	12 (5.4%)
2	8 (17.4%)	16 (7.2%)
合計	46 (100%)	222 (100%)

人数6人がぎりぎりやりくりできる額である。69.6%の世帯が1日の生活費に余裕がない状況である。人口の36%を15歳以下が占める(Municipality of Cordova 2004)。

以上、コルドヴァでは貧困のため非雇用の状態に置かれている世帯や人びとは4割に達し、平均以下の年収で暮らしている世帯は6割に上る。生産年齢以下の人口が4割を占め、学費や養育費など家計を圧迫する要因になっている。生産年齢以下の人口が多いほど、家計への圧力は強まる。小学校と高等学校にしか進学しない割合は75%に上る(Municipality of Cordova 2010)。役場やマクタン輸出加工特区で働くことができるのは、高卒以上である。定職がない場合、1日350ペソ程度の日雇いなどの賃労働を取り入れて生活の危機をしのごう。

K集落では、コルドヴァの中でも貧困層が多く集住している。水道、ガス、トイレが十分に普及しておらず、電気の代わりに灯油ランプを用いる世帯もある。生活用水は井戸水を利用している。調理の際の煮炊きには薪や炭を用いている。近年、安価なウォーター・サーバーやカセット・コンロが浸透しつつある。

K集落で実施した、世帯人数(n=46世帯)と生業形態(n=50世帯)に関する簡易質問紙調査の結果をここで挙げておきたい。まず、世帯人数(表2)についてだが、2~9人の範囲であった。世帯人数が4~7人の世帯が最も多く、次いで2人が多い結果となった。簡易質問紙調査で得られた総人数は222人であり、世帯人数4~7人の世帯の世帯人数合計が多い。世帯総人数(n=222人)を世帯数(n=46世帯)で割るとK集落の平均世帯人数は4.8人となり、コルドヴァの平均あるいはフィリピンの平均とされる6人より低い数値となった。統計によるフィリピンの平均世帯人数は4.6人である(National Statistics Office 2010)。コルドヴァの役場資料では平均6人と記されているが(Municipality of Cordova 2004)、平均世帯人数を同様に算出すると5.6人である。フィリピンではしばしば平均世帯人数は6

表3 K集落の男女別就業形態

(簡易質問紙により著者作成)

職種	男性	女性
漁撈	7 (16.7%)	0 (0.0%)
市場での魚・貝売り	0 (0.0%)	9 (17.6%)
無職	7 (16.7%)	1 (2.0%)
日雇い労働	5 (11.9%)	0 (0.0%)
主婦	0 (0.0%)	29 (56.9%)
トリシカッド・トライシクル	7 (16.7%)	0 (0.0%)
貝細工	2 (4.8%)	0 (0.0%)
商店売り子	0 (0.0%)	1 (2.0%)
ガードマン	1 (2.4%)	0 (0.0%)
教員	0 (0.0%)	1 (2.0%)
家政婦	0 (0.0%)	1 (2.0%)
修理工	2 (4.8%)	0 (0.0%)
配達業	1 (2.4%)	0 (0.0%)
製造業	9 (21.4%)	8 (15.7%)
海外出稼ぎ	0 (0.0%)	1 (2.0%)
船乗り	1 (2.4%)	0 (0.0%)
合計	42 (100%)	51 (100%)

人だと語られるが、バイアスがあることを確認しておきたい。つまり、K集落の世帯人数(4.8人)はフィリピンの平均(4.6人)よりは多いが、コルドヴァの平均(5.6人)よりは少ない。世帯人数が多いから貧困であるという言説は、確かにそのような傾向と側面はあるかと思われるが、厳密にはあてはまらないだろう。世帯外に扶養家族や親族がいる場合、双系制のフィリピン社会では扶助の対象となる。数字に現れない扶養者を調べた上で、人びとの経済的状态をとらえる必要がある。

K集落の生業形態(表3)について、男性は漁撈、無職、日雇い労働、トリシカッド(*trisikad*)・トライシクル(*tricycle*)の運転手、製造業が主である。無職や日雇い労働でも、漁撈に出ることがあるので、単に無職や日雇いととらえることはできない。トリシカッド・トライシクル運転手は、これらの乗り物を購入する資本が必要である。雇われ運転手の場合は雇い主との社会関係が必要である。製造業はマクタン輸出加工特区で働くことであり、高卒以上の学歴が求められる。女性は、市場での魚・貝売り、主婦、製造業が主である。市場での魚・貝売りは、家族が漁獲した海産物を公設市場で売るが、自身も海に出て特に貝類を採捕する場合もある。主婦もまた、海に出ることがある。製造業は男性と同じ形態である。海外出稼ぎや船乗りは、学歴があり、高収入を得やすいホワイトカラーとみなされる傾向がある。

世帯人数と生業形態について、世帯人数が多いことと貧困であることは必ずしも結びつくものではないことが浮かび上がった。また、男性の無職・日雇い労働、女性が主婦であることが目立った。セブ州の最低法定賃金は月7,000ペソほどであり、日雇いだと350ペソ程度である。この数字は役場の推定より低く、実際の生活はよ

表4 K集落の1女性JMの2015年3月19日～21日の3日間における栄養摂取状況（平田昌弘未発表データ）

	エネルギー		タンパク質		脂質		炭水化物		灰分	
	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率
	kcal	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)
1日当りの食料総摂取量	1320.9		38.9		25.1		232.2		6.6	
内、自給量 (自給率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
内、購入量 (市場依存率%)	1320.9	(100.0)	38.9	(100.0)	25.1	(100.0)	232.2	(100.0)	6.6	(100.0)
内、分配供給量 (分配依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
内、労働対価供給量 (労働対価依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
地域内供給量 (地域内供給率%)	46.5	(3.4)	5.9	(14.9)	1.9	(6.4)	2.2	(1.0)	0.7	(10.7)
地域外供給量 (地域外供給率%)	1274.4	(96.6)	33.1	(85.1)	23.2	(93.6)	230.0	(99.0)	6.0	(89.9)
魚介類依存量 (魚介類への依存率%)	87.9	(6.7)	12.7	(32.8)	4.0	(18.6)	1.9	(0.8)	1.1	(16.9)
肉類依存量 (肉類への依存率%)	30.7	(2.3)	1.3	(3.3)	2.5	(8.7)	0.6	(0.3)	0.2	(3.7)
乳製品依存量 (乳製品への依存率%)	7.9	(0.6)	0.5	(1.2)	0.3	(1.7)	0.7	(0.3)	0.0	(0.0)
砂糖依存量 (砂糖への依存率%)	12.5	(0.9)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	37.4	(16.1)	0.0	(0.0)
米類依存量 (米への依存率%)	614.4	(47.2)	10.5	(27.2)	1.6	(7.5)	133.1	(57.4)	0.7	(10.7)
豆類依存量 (豆への依存率%)	10.7	(0.9)	0.8	(2.0)	0.0	(0.3)	1.8	(0.8)	0.1	(1.8)
油類依存量 (油への依存率%)	49.0	(3.6)	0.3	(0.8)	5.7	(22.2)	0.3	(0.1)	0.1	(1.0)
塩分摂取量									1.9	

りきびしいことが推察される。日々の食料、嗜好品、子どもの小遣いや学費、光熱費、雑費など、実際に家族を養うには苦しい額である。K集落では、生活苦のため、違法漁業に従事したり、消費者金融に手を出したりしている人もいる。マクタン輸出加工特区で働く人たちは、11,000～27,000ペソの月収を得ているが、生活が豊かであるわけでない。稼いだお金は、家族や親族のために消費される。

以上、収入を多く得ても、生活の余裕にはつながりにくい経済構造にある。生産年齢以下の子どもや体の不自由な老人などを抱えると、食料が逼迫する。1日に3食を食べられないことや、穀類を食の基本としつつも、野菜、果物、魚介類、肉といった副食の購入がしづらいことが恒常化している。魚介類は何とか自給できるレベルであるが、そのほかは外部に依存しなければならない。本稿の主題である農産物をはじめ、経済的な問題が栄養問題としても具現化している。

2-4. 栄養的側面

K集落の住民は野菜をはじめ栄養不足の状態にある傾向が伺われる。住民の栄養について計量したのが表4と表5である。これらの表は集落内の2人の主婦JM(43歳)とRE(54歳)の栄養状態を示したものであ

る。JMのデータは2015年3月19日～21日の3日間、REのデータは2015年3月23日と27日の2日間に取得されたものである。栄養調査は常に個体に密着して、摂取した食物を記録することから、大勢の人数のデータを短期間に得ることは容易ではない。また、主婦を対象としているが、主婦が最も家屋に定着しており、観察が比較的しやすいことから調査の対象として選んだ。それでも、目を離した時に買い食いなどをすることがあり、本稿のデータはこうした問題点を含むが、おおよその傾向をとらえたものである。

調査の結果、JMの平均摂取カロリーは1,320.9kcalという数値であった。フィリピン人にとって目標とされる2,000kcalを大きく下回っている。この背景として、彼女が8人の子どもを出産し、現在6人の子どもと孫1人の面倒を見ていること、漁を主に行う夫に定職がなく家計に回す稼ぎが十分でないこと、そして彼女自身が小食であることなどが要因として考えられる。一方、REの平均摂取カロリーは1,677.7kcalであった。REの夫と息子は積極的に漁を行い、彼女はその漁獲を公設市場で売って生計を立てている。JMに比べ、夫の漁での定期的収入があること、労働力としての息子がいること(JMは長女と次女を持つが、共に結婚歴があり、長女

表5 K集落の1女性REの2015年3月23日と27日の2日間における栄養摂取状況（平田昌弘未発表データ）

	エネルギー		タンパク質		脂質		炭水化物		灰分	
	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率
	kcal	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)
1日当りの食料総摂取量	1677.7		57.3		35.0		290.2		9.9	
内、自給量 (自給率%)	178.9	(10.1)	27.0	(43.4)	9.0	(23.2)	0.2	(0.1)	1.7	(15.7)
内、購入量 (市場依存率%)	1498.8	(89.9)	30.4	(56.6)	26.0	(76.8)	290	(99.9)	8.2	(84.3)
内、分配供給量 (分配依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
内、労働対価供給量 (労働対価依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
地域内供給量 (地域内供給率%)	261.4	(14.7)	28.0	(45.2)	13.0	(32.5)	8.7	(3.2)	1.8	(17.9)
地域外供給量 (地域外供給率%)	1465.8	(88.0)	29.7	(55.2)	24.1	(71.7)	288.5	(99.4)	8.3	(86.1)
魚介類依存量 (魚介類への依存率%)	178.9	(10.1)	27.0	(43.4)	9.0	(23.2)	0.2	(0.1)	1.7	(15.7)
肉類依存量 (肉類への依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
乳製品依存量 (乳製品への依存率%)	27.3	(1.7)	1.3	(3.2)	1.0	(4.4)	3	(1.0)	0.0	(0.3)
砂糖依存量 (砂糖への依存率%)	60.0	(4.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	61.4	(21.7)	0.0	(0.0)
米類依存量 (米への依存率%)	677.0	(41.4)	9.0	(18.9)	1.3	(5.1)	153.2	(52.5)	0.6	(7.9)
豆類依存量 (豆への依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
油類依存量 (油への依存率%)	34.7	(1.9)	0.0	(0.0)	3.8	(7.6)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
塩分摂取量									2.5	

は娘を実家に預けマニラに出稼ぎ、次女はラブラブ市で子育てをしつつ学業を続けている)、手のかかる幼い子どもがおらず公設市場で働けることなど、経済活動に従事できる家族状況にあると考えられる。

JMが摂取するカロリーの96.6%は地域外供給、つまり自分たちで生産したものやコルドヴァ内で入手できるものではなく、公設市場や食堂などでの購入をとおして摂取する。労働で得られる資源で生計を展開するのではなく、ほぼ購買による資源を消費することで済ませる栄養摂取構造である。十分な生業資源や収入があれば収支は成り立つが、家計が苦しいJMのような場合、貧困に拍車をかける。特に、毎日の食事のおかずは、調理するより、外部の食堂などで購入する方が楽で手間もかからない。JMは子どもの世話や大量の衣類の洗濯をはじめ、一日中家事に忙殺されている。実際、消費に家計は圧迫されており、親族のネットワークを駆使し、食物の融通をつけたり、借金をしたりする。JMの夫は高金利の貸金業者に借金をしている。このような家計事情がJMの低い摂取カロリーとして現れているのかも知れない。一方、REの場合、摂取カロリーの地域外供給率は88%である。こちらも高い数値であるが、魚介類の生産と販売が貢献していると推察できる。魚介類への依存率も、

RE(10.1%)がJM(6.7%)を上回っていることから若干支持できる。肉類の依存率は、JM(2.3%)、RE(0.0%)であるが、JMは食堂などで既製品のソーセージやフライドチキンを頻繁に購入するからであろう。肉類、特に家畜の肉は、誕生日や祭りなど、特別の機会に食される。乳製品は練乳を使った菓子やコーヒーミルクなどであり、嗜好品である。JMの依存率は0.6%、REは1.7%である。砂糖依存率は、主に嗜好品であるコーヒの飲用と関係する。JMの依存率は0.9%、REでは4.0%である。嗜好品の場合、経済的に余裕があれば依存率が高いと言えるかも知れない。しかし、ミクロなレベルにおいての現象の解釈に過ぎない。米への依存率は、JMは47.2%、REは41.4%とどちらも高い割合である。米は主食であり、おかずよりも優先される。JMの方がREより依存率が高いのは、幼児や育ち盛りの子どもを抱えているからであろう。JMは毎日のように、幼児や年少の子どもの口に米と若干のおかずを手で運んで食べさせていた。家計に余裕がない場合はトウモロコシが代用され、危機的な場合は米がない状態になる。マメ類依存率について、本稿は農産物一般を対象としているが、調査の関係上、マメ類に特化した項目となってしまった。後ほど、農産物の摂取について補足したい。マメ類につ

いては、JMは0.9%、REは0.0%であった。マメ類の摂取が低いことをREは示している。JMも同様の傾向にあるが、息子が公設市場の農産物売り部門の清掃を手伝ったことでただでもらってきたクズ野菜に含まれていたジュウロクササゲ、スープなどに調理されるリョクトウを摂取した数値である。油類依存率は、JMは3.6%、REは1.9%だった。両者の差について、調理法や健康意識の違いが反映していると仮定しておく。高血圧や糖尿病の人びとは少なくなく、これらの疾患はだんだん深刻視されてきているようである。それでも、油を用いた料理は、味つけだけでなく、食物を保存する上でも欠かせない。塩分摂取量は、JMは1.9%、REは2.5%だった。これも油類と同様、調理法の違いと言えるかも知れないが、健康意識の違いとは矛盾する。REの世帯の方がJMの世帯より年配なので、健康を意識するようなら塩分の使用は控えられてしかるべきである。油類や塩分はそこまで注意深く利用されていないと考える方が自然である。

栄養素については、フィリピン国内の比較可能な資料が手元にないが、便宜的に日本人の資料（香川編2014）と比較すると、タンパク質はJMが38.9g、REが57.3g摂取しており、2011年の日本人の平均67gを下回る。JMの数値は明らかに低く、REは日本人の数値により近い。脂質はJMが25.1g、REが31gであり、両者とも日本人の平均54gを大きく下回る。炭水化物は、JMが232.2g、REが290.2gであり、日本人の平均255gと大差ない。灰分については参照できる資料がなく、割愛した。2009年のフィリピンの1人1日あたりの摂取カロリー表（香川編2014）を参照した場合、魚介類への依存度の平均は70kcalであり、JMが84.8kcal、REが178.9kcalであり、共に平均を上回っている。このことは彼女らが漁家に属していることと大きく結びつくであろう。JMとREの間には2倍以上の差があるが、JMの夫が調査当時、漁撈より建築現場の賃労働に主に従事し、一方、REの夫と息子は漁撈に専心していたことが理由であると考えられる。肉類への依存度はJMが30.7kcal、REが0.0kcalであり、フィリピンの平均238kcalとは別次元の印象を受ける。一般的にフィリピン人は肉を好むが、肉がほとんど摂取されていない結果となった。乳製品では、平均18kcalに対し、JMは7.9kcal、REは27.3kcalと平均を挟んだ結果となった。砂糖の平均は224kcalであるが、JMは12.5kcal、REは60kcalであり共に不足している結果が出た。米類の平均は1,432kcalだが、JMは614.4kcal、REは677kcalであり、共に平均の半分以下の数値となった。

表6 K集落1世帯の2015年3月19日～20日における農産物摂取状況

（平田昌弘未発表データをもとに著者作成）

	2015年3月19日		2015年3月20日	
	摂取比率		摂取比率	
野菜	kcal	(%)	kcal	(%)
タマネギ	15	13	0	0
タマネギの葉	23	19	9	4
トマト	66	55	0	0
トウガラシ	16	13	0	0
リョクトウ（スープ）	0	0	160	69
ワサビノキ	0	0	64	27
合計	105	100	233	100

豆類の平均は17kcalであり、JMは10.7kcal、REは0.0kcalであり、積極的に摂取されていないようである。油類の平均は171kcalであるが、JMは49kcal、REは34.7kcalであり、両者とも平均を大きく下回った。

農産物の摂取状況に関して、2015年3月19日から20日の2日間におけるJM世帯のデータを報告する（表6）。重量のデータが欠損しているが、6種類の農産物が食卓に上るのが確認できた。タマネギとタマネギの葉は同一であると混乱を招くことがあるかも知れないが、両者とも品種の違うタマネギなので別種とした。リョクトウを除き、日常的にほぼ普通に摂取される農産物である。リョクトウはスープに調理された既製品である。3月19日は4種類、3月20日は3種類の農産物が食された。前者は105kcal、後者は233kcalであるが、この数字は家族全員分である。世帯構成員は、7人であり、40代の夫婦2人、15～17歳の男女2人、12～14歳の男女2人、1～2歳の女1人である。ここでは性差と年齢を考慮していないフィリピンの1人1日あたりの農産物エネルギー供給量76kcal（香川編2014）との比較を行う。2日間の農産物摂取量105kcalと233kcalの数値を世帯構成員7人で割ると、それぞれ15kcalと33.2kcalとなる。結果、フィリピンの平均値よりおよそ5分の1から2分の1の農産物摂取量であることが、ごく部分的ではあるが認められる。

以上、主に2人の女性の個体差と数日間の調査に基づいた結果である。個体史、家族史、社会史などの背景、調査の質的問題、分析手法など様々な課題が残るが、蓋然性は認められると思われる。農産物の摂取については、K集落の限られた事例であるが、フィリピンの平均より20～50%低い結果が出た。公設市場が近く、農産物にアクセスしやすい位置にいるにも関わらず、農産物が不足している。そこには、農産物が購入できない経済的事情のほか、農産物を分配してもらえない人間関係が希薄な社会的事情などが影響していると考えられる。

3. コルドヴァの公設市場と農産物のネットワーク

3-1. 公設市場の構造

コルドヴァの公設市場は、「中心地」を意味するバランガイ・ポブラシオン (Barangay Poblacion) に位置する。バランガイとは行政区を表し、コルドヴァには13のバランガイが確認できる。バランガイに包摂される下部の単位はシティオ (Sitio) であり、集落や村のイメージに近い。コルドヴァには66のシティオが存在する (Municipality of Cordova 2004、2010、2014)。K集落は市場に隣接して立地している。市場周辺には、ポブラシオン行政区役場のバランガイ・ホール、体育館、公園、教会、高校、コルドヴァ町役場などがある。また、客待ちするトリシカッドやトライシクルで市場の正面とその付近は混雑している (写真7)。市場は、売り子や店舗ごとの判断は異なるが、基本的に毎日開いている。定期市の存在は確認できていない。祭りなど活気のあるイベントがある時、他地域からの行商人が多く確認できる。公設市場を模式図化したのが図2である。市場の建物自体はAとBで示した空間であり、屋根で覆われる。Aは鮮魚、野菜、果物、精肉などを扱う生鮮部門である。基本的に縦に4列の1m四方ほどのブースが並び、ブースはタイル張り、電球と、売り子や番号を示した

看板が掛けられている。縦列の鮮魚のブースは2列28軒あり、看板には女性の名前26、男性の名前1、不明1が確認できるが、売り子は女性がほとんどであり、男性は見かけない。右側の1列目のブースでは、図では「魚」と示したが、ほとんどコルドヴァで獲られた魚介類が売られている。K集落の女性たちはこの列で夫や親族が漁獲した地場の魚介類を売る。魚介類は、コルドヴァの周辺離島やポホール島などからも親族やスキのネットワークを介して運ばれる。売り子の居住地はコルドヴァ内がほとんどだが、コルドヴァの離島 (ヒロトゥンガン島など) も含まれる。2列目の魚のブースでは、主にセブ本島のパシル市場 (Pasil Market) など外部から運ばれてくる魚が売られている。コルドヴァと境を接するラプラプ市 (Lapu-Lapu City) のババグ (Babag) の養殖池からも、収穫期にはサバヒー (*bangus*)、いわゆるミルクフィッシュが運ばれてくる。Aの空間には製氷機があり、魚介類はコルドヴァの公設市場からまた別の場所に運ばれて行くようである。

Aの空間の縦3列目と4列目では、主に野菜と果物が売られている (写真8)。図では、野菜と果物を「野菜」と一括した。野菜のみを扱う売り子、果物のみを扱う売り子、両方を扱う売り子の区別については、本稿では明

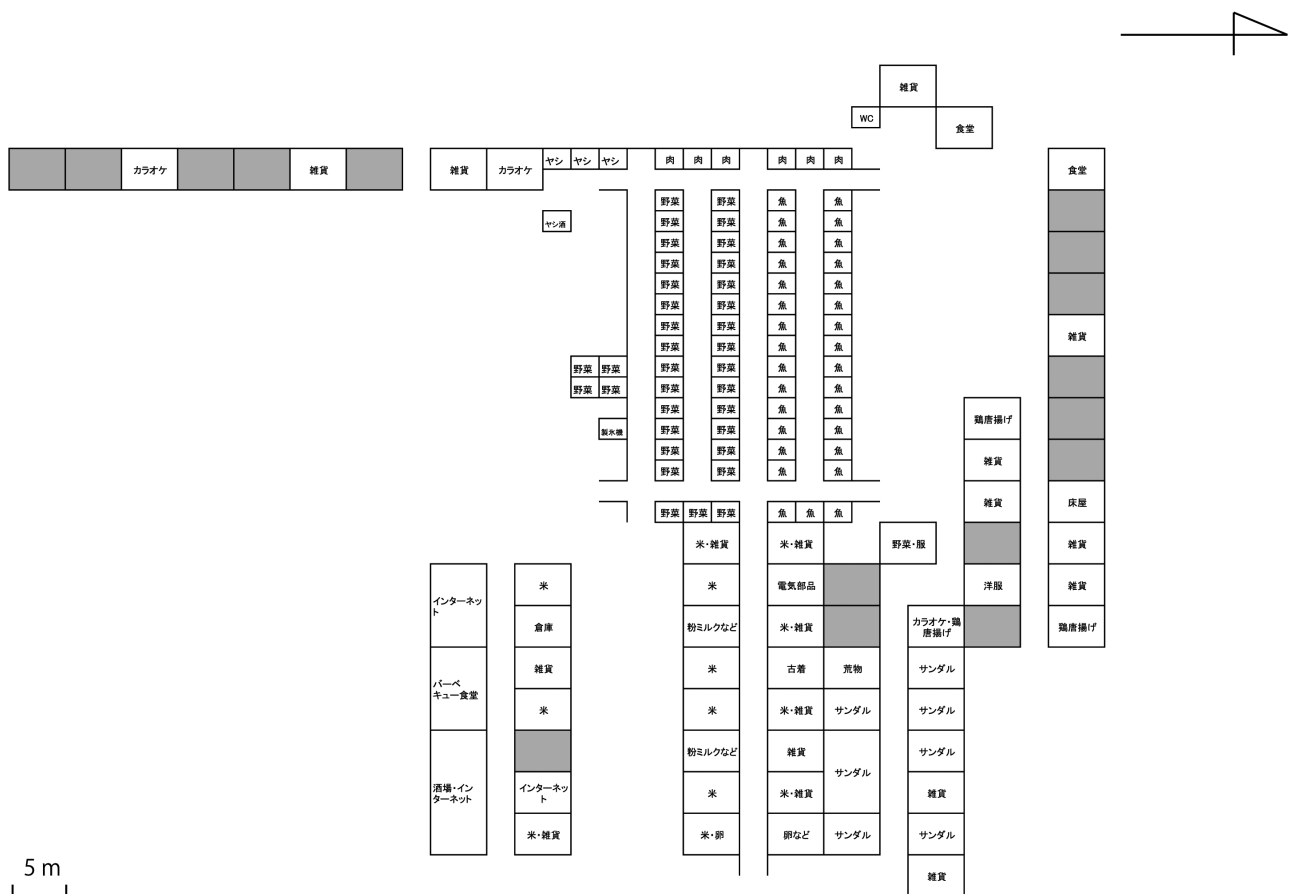


図2 コルドヴァ公設市場と周辺の模式図 (著者作成)

確にしきれていない。時によって扱う商品の項目に変化が見られるなどの要因があるが、今後、精度の高い観察と聞き取りで売り子の特性を明らかにする必要がある。ブースの看板には女性の名前 24、男性の名前 3、不明 1 が確認できた。1 人で 2 軒のブースを借りているケースが 1 件あった。売り子のほとんどは女性である。野菜売りの中には 4 列目の左に 4 軒確認できるよう、ブースと同じくらいの大きさの小型店舗を併用している者もいる。これらに名前や番号は確認できない。

A の空間上部には、「肉」と「ヤシ」を扱うブースがある。肉のブースには店の屋号と番号が確認できる。鶏肉と豚肉、ソーセージなどを扱っている。鶏肉はセブ本島の数業者（3 業者ほど）が、コルドヴァの鶏肉の流通を寡占している。豚肉は、セブ本島の養豚場から買いつける。牛肉はあまり市場には現れない。売り子の性差は女性と男性どちらも確認できた。ヤシを扱うブースでは、皮を向いたヤシの実（*butong*）が売られる。

ヤシの実カルボン市場（Carbon Market）周辺の露店で購入される。ブースにはヤシの実の中身の胚乳部分を削るグラインダーが設置されており、胚乳部分を粉にして客に渡す。粉に水を加えて絞るとココナツミルクができる。グラインダーを使った仕事は労力を要するので、売り子は男性である。ブースの名前や番号は確認できなかった。ヤシのブースの側には、「ヤシ酒」（*tuba?*）を扱うブースがある。ヤシ酒はボホール島から毎日運ばれてくる。売り子は女性である。そのほか、空間 A の下部には魚と野菜を扱う売り子がいるが、ブースはなく、テーブルの上に商品が並べられているだけであり、ブースのような名前や番号はない。空間 A の周辺には、各自持ち寄った魚や野菜を地べたで売る人もいる。ブースがある人から、地べたで売る人まで、市場使用料を支払う義務がある。役場の集金係の女性がレシートと引き換えに使用料を徴収していたが、ほとんどが 10～20 ペソであった。商いの規模や時間によって使用料は変わってくると思われる。中には、月ごとに支払っている売り子もおり、一概に判別しにくい。

B の空間では、「米」、「米・雑貨」、「サンダル」を商う店舗が目立つ。こちらはブースでなく店舗である。店舗には看板が立てられている。市場使用料は年ごとに徴収されるという。米については次章でも触れるが、「米」を商う店舗と「米・雑貨」を扱う店舗では米の入手経路が違う。前者は卸売り業者から、後者はカルボン市場やマクタン島の中心部にあるラプラプ市場から入手する。雑貨とは、油、しょう油、塩、味の素、酢、練乳など、調理に必要な調味料や缶詰などを指す。菓子や飲み物を

一般的に扱うサリサリ・ストアとはやや異なる。雑貨は、セブ本島のマンダウエ市（Mandaue City）内で入手するという売り子もいるが、全体像と具体性は現段階では不明である。サンダルは消耗品であることから、店舗がそろっていることが伺える。すり切れたサンダルは、切り刻んで袋詰めにして売られる。調理の際の着火剤として重宝されている。

A と B は、ブースと店舗という違いから、経済力の違いが推測される。A の空間の売り子は、商品の漁獲や頻繁な仕入れの観点から移動的であり、B の空間の売り子はより定定的であるとの見方もできる。

A と B 以外の市場周辺の店舗は、もとは市場の利用者を目当てに出現したのであろう。「食堂」は市場の利用者や、K 集落の人びとのような周辺住民の食に役立っている。最近では、「鳥の唐揚げ」ビジネスが盛況のようである。「カラオケ」もフィリピン人の娯楽には欠かせない。「雑貨」はサリサリ・ストアのことである。「サンダル」の店舗も市場同様、目立つ。「インターネット」は、インターネットの利用も可能だが、ほぼゲームセンター化している。「WC」はトイレだが、1 回 10 ペソ程度を使用料として支払う有料トイレである。

なお、図において、市場とその周辺店舗のうち灰色で示したものは常に閉まったままの状態であった。業態については不明である。

市場の利用時間と利用客数について記録したのが表 7 である。野菜、魚介類、精肉を扱う生鮮部門の空間のみを対象とし、穀類、雑貨を扱う部門はデータ取得上の混乱を避けるため対象外とした。5 時半から 19 時半までの 1 時間ごとに、市場の利用客の数をカウントした。5 時半から 19 時半までを対象時間帯としたが、24 時間観察した結果、利用客の行動時間帯とほぼ一致している。調査の都合上、8 月 18 日、19 日、22 日の 3 日間

表 7 コルドヴァ公設市場の利用者数の時間的推移

時間	8月18日(火)	8月19日(水)	8月22日(土)	(%)
5:30	-	-	6	1.2
6:30	-	-	14	2.8
7:30	-	-	17	3.4
8:30	-	17	-	3.4
9:30	-	11	-	2.2
10:30	-	19	-	3.8
11:30	-	7	-	1.4
12:30	-	5	-	1.0
13:30	-	4	-	0.8
14:30	-	29	-	5.8
15:30	-	38	-	7.6
16:30	-	97	-	19.4
17:30	160	-	-	32.0
18:30	70	-	-	14.0
19:30	6	-	-	1.2
				100

にデータが分かれてしまったが、おおよその傾向を見ることが出来る。利用客に抱えられていた乳飲み子については少なくないが本表ではカウントしていない。市場には5時半には利用客が現れはじめ、19時半には終息に向かう。利用客が最も多い時間帯は17時半で、160人(32.0%)を確認した。夕食の準備のための買い物客が多い。最小は13時半の4人(0.8%)であった。朝方の利用客数は、本表の8月19日(水)では目立って多くない。朝食や昼食の準備に通常ではより多くの利用客が確認できるが、この日は台風のため魚介類が市場に届くのが大幅に遅れたことが影響したことを指摘しておきたい。なお、調査では、売り子の数についてはカウントしなかった。各販売ブースに、基本的に1人が登録されているが、最少1人、スペースの都合、最大3人程度である。売り子が複数の場合、たいてい親子関係や親族関係にあり、休憩交代などの時間により人員の構成に変化も見られる。売り子同士の社会関係、さらには売り子と利用客の社会関係についての調査は今後の課題である。

3-2. 農産物の仕入れ

農産物や魚介類の仕入れは、深夜にセブ本島のカルボン市場周辺とパシル市場で行われる。カルボン市場周辺では主に農産物が、パシル市場では魚介類が買い求められる。コルドヴァでは、日中は、モーティカブが長距離輸送を担っており、大型のジープニーは確認できない。深夜になると、普段はマクタン島の中心地ラプラプ市内やセブ本島市内を走っているジープニーが現れる。ジープニーは23時から1時半の間に、最低3便あることを確認した。モーティカブも運行しているが、買い出しの帰りは荷物があることからジープニーが選択されると思われる。

著者は、2016年8月19日、3便のうち2便を運行するジープニーの1台に乗車し、乗客と乗員の動きを観察するとともに、市場との往復ルートをGPSで捕捉した(図3)。ジープニーの構成員は、運転手1人と荷夫2人であった。いずれも雇われており、1日2回の運行で、運転手の日当は300~400ペソ、荷夫はその半分である。オーナーはセブ市内で商店を営んでおり、夜はもう1台のジープニーの運転手として働く。モーティカブも1台所有する。カルボン市場周辺へのジープニーは23時と23時半に運行させている。コルドヴァからカルボン市場周辺までの運賃は片道25ペソである。23時半発のジープニーには11人の乗客がおり、いずれも女性であった。ジープニーは23時53分に出発した。途中、道路沿いで8人の乗客を拾った。8人のうち、

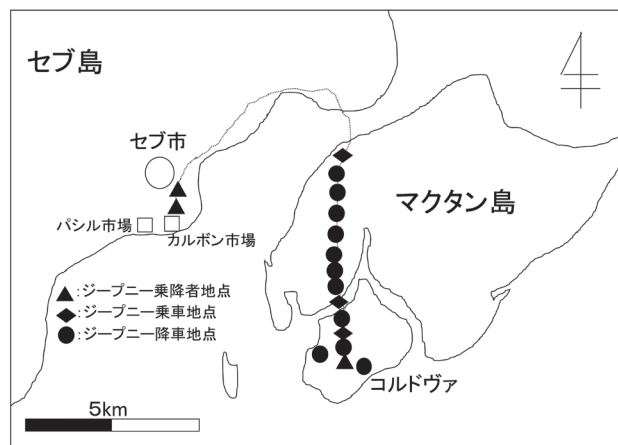


図3 コルドヴァからセブ本島への野菜の仕入れルート (著者作成)

6人は男女の組で、2人は女性だった。ラプラプ市の中心部を通過し、24時31分、カルボン市場周辺のある地点で4人が降車した。24時40分、カルボン市場周辺の繁華街の中でジープニーが停車した。コルドヴァから50分ほどの移動時間を要した。乗客たちはジープニーから降りると、それぞれ買い物に散って行った。ジープニーはこの場所で3時半まで乗客を待ち、乗客が購入した荷物を積んで、コルドヴァに引き返す。繁華街の路上には多くの露店が並び、大量かつ様々な農産物を売っている(写真9)。コルドヴァの公設市場の農産物売りの人びとは、カルボン「市場」ではなく、カルボン市場周辺の繁華街の「露店」で農産物を買う。露店の方が、カルボン市場より安値で買える。人びとは少しでも安い農産物を求めて、露店を物色する。露店で農産物を売る人びとは、カルボン市場で農産物を売る人びとはではないと言われる。繁華街の店舗の営業が終了すると、店の前に露店を出す。彼らが商う農産物は、セブ島山地部の、バリリ(Barili)、アルガオ(Argao)、ダラゲティ(Dalagute、マンタロンゴン)などから運ばれてくる。魚介類を買い物する人は、トリシカッドでパシル市場に向かう。繁華街から5分程度の距離であり、運賃は20ペソであった。復路、ジープニーの出発前になると車内は人で、屋根の荷物置きには荷物であふれ返った(写真10)。乗客は往路が18人であったが、復路は最低27人に増加した。往路以外の乗客も乗車した。乗客の半数は単独の女性であった。深夜であったが、数人の子どもも確認できた。3時半発のジープニーは3時22分に出発した。続いて、オーナーが運転するもう1台のジープニーも発車した。乗客はラプラプ市やコルドヴァの各地点でそれぞれ降車し、4時17分、ジープニーはコルドヴァの公設市場に到着した。荷物を降ろし、4時29分、ジープニーは役目を終えた。ジープニーが2台利用されたが、儲けを

上げることも去ることながら、治安が良くないとされる深夜のカルボン市場周辺の繁華街および道中の自己防衛のための隊列が組まれていると思われる。

仕入れを済ませた農産物売りの初老の女性乗客は、公設市場に戻るなり、休息も取らずに、すぐに農産物を加工し、販売を始めた。客足の少なくなる午前中頃に睡眠をとり、再び深夜には農産物の仕入れに向くという。彼女は痴呆気味の父親と、隣に店を構える親族と農産物売りをしているが、意思決定は彼女が主に行っていた。農産物は、管理が重要であり、管理を蔑ろにしたり、運が悪かったりするとネズミの食害などによるリスクがある。食害された農産物は、切り売りして販売不能なほどダメージが大きい（写真 11）。農産物売りは、経済市場での農産物の市場価格の急落のほか、こうした農産物の価値が失われる損傷の危機に曝されている。

3-3. 農産物の値段

コルドヴァの公設市場では、少なくとも 30 軒の農産物売りがしのぎを削っている。農産物の値段は、仕入れの経費や儲けを含んでいるが、農産物売り間で淘汰され、特別に高い、安い値段設定はされていないと考えられる。深夜に安い農産物を仕入れる労苦を払うことで、少しでも安く仕入れ、利用客が競合者に流れないように適度な値段で売ることが慣習になっているようである。深夜に農産物を仕入れることは、もちろん日中の販売活動に支障が出るからであろうが、誰もがやりたがるほど楽な活動ではない。魚売りが深夜のパシル市場に仕入れに行くのも同様である。

公設市場に並ぶ農産物は、50 種類以上に及ぶ。後述する穀類に至っては、品種とブランド名が多様であり、69 種類を確認した。本調査では、農産物のすべてをリストアップすることはできなかったが、K 集落の住民が主に購入している野菜は、小型のトマト (*kamatis*)、紫色の小型のタマネギ (*bombay*)、ショウガ (*luya*)、ニンニク (*bawang*)、トウガラシ (*espada*) などである。これらの農産物は頻繁に購入され、料理に利用される。スープ (*tinowa*) や、酢と塩とニンニクで煮た魚 (*paksiw*) によく合わせられる。タマネギ、ショウガ、ニンニク、トウガラシはスパイスでもあると考えられる。これらの農産物は、安値かつ少ない量で購入可能である。ニンニクは 1 かけらから購入できる。どれも 1 ペソから 5 ペソの範囲で買える。彼らの食の外部依存率は高く、食事は作るより、外で購入した方が、手間や労力の観点からも安上がりである。近くの食堂や露店で売られている料理をビニール袋に入れて持ち帰るが、1 品あたり 5 ～ 20 ペソ程度である。これら外部で購入した料理の中に

も、上記の農産物が含まれている場合がほとんどである。つまり、K 集落だけでなく、より広い範囲でこれらの農産物が利用されている。これらの農産物は、民間的な薬効が認められている (Quisumbing 1978)。K 集落の住民は経済的に貧しいことから、これらの安くて便利な農産物を多用していると表面的には見受けられるが、健康に適した素材として選択し、永らく利用してきたのかも知れない。

農産物は量り売りか個数ごとで販売される。公設市場すべての農産物売りの農産物の品目と仕入れ価格および販売価格について記録することはできなかったが、ここでは野菜売り 1 人と果物売り 1 人のデータを取り扱いたい。

まず、野菜売りの女性 GP 氏 (59 歳) について取り上げる。彼女は公設市場に 2 つのブースと小店舗 1 店を持つ。父親と親族と協力しながら、野菜売りを行っている。頻繁に深夜のカルボン市場周辺の露店に野菜の買い出しに行き、その後早朝から野菜の販売に従事する。彼女の野菜仕入れの経費は、交通費と露店周辺でポーター (*kargador*) 料などであり、それに儲けが上乘せされる。彼女が扱っていた野菜は 24 種類を確認したが、仕入れ価格と販売価格が明確に確認できた野菜 15 種類を表 8 に挙げた。

仕入れ価格と販売価格の差、つまり儲けを聞き出すのは野菜売りと著者の間にある種の「いやらしさ」を創り出す。野菜の販売単位、1 日の儲けなど、著者の側で明らかにできていない点はあるが、市場の一般の利用者の目も意識されている。GP 氏は著者に「自分は人びとのために良心的価格で野菜を売っている」と述べたが、ほかの野菜売りたちも競争の原理でおおよそ GP 氏に近い価格で野菜を販売していた。GP 氏は kg 単位で野菜を

表 8 コルドヴァ公設市場の野菜売り女性 GP 氏の野菜の仕入れ価格と販売価格 (著者作成)

和名	方名	仕入価格 (ペソ)	仕入 単位	販売価格 (ペソ)	販売 単位
ハヤトウリ	<i>sayote</i>	2	kg	7 ~ 10	kg
サツマイモ (葉)	<i>kamoteng tops</i>	4	kg	10	束
タマネギ	<i>sibuyas</i>	35	kg	76	kg
オクラ	<i>okura</i>	10 ~ 15	kg	20	kg
ショウガ	<i>luya</i>	120	kg	150	kg
トウガラシ	<i>espada</i>	100	kg	2	個
カボチャ	<i>kalabasa</i>	15	kg	20	kg
ユウガオ	<i>kalabasang puti</i>	10	kg	15 ~ 20	kg
ニンニク	<i>bawang</i>	76	kg	100	kg
ダイコン	<i>labanos</i>	10	kg	20 ~ 25	kg
ウコン	<i>luyang dilaw</i>	40	kg	60 ~ 85	kg
トマト	<i>kamatis</i>	20	kg	42	kg
シトウガラシ	<i>sili</i>	120	kg	200	個
ネギ	<i>dahong sibuyas</i>	120	kg	150	束
ワサビノキ (葉)	<i>kalunggay</i>	10	kg	2	束

仕入れるが、そのまま儲けを上乗せして kg 単位で売
 場合がほとんどである。Kg 以下の場合は g 単位で、ト
 ウガラシなどの小さなものは個単位で販売する。サツマ
 イモの葉やワサビノキの葉は kg 単位で仕入れ、目分量
 および感触 で束に分けたものを売る。仕入れ価格に対
 し販売価格はおよそ 25～250% 増しであり、コルドヴァ
 の公設市場では野菜の値段が決して安いものでないこと
 が伺える。野菜売りにとっては、これくらいの値段設定
 をしないことにはくたびれもうけの商いとなり、利用客
 が何とか手の出る価格設定になる戦略も講じられてい
 るはずである。要は、いかに野菜を安く仕入れるかが野菜
 売りたちの生命線となっていると言えよう。そのために、
 深夜のカルボン市場周辺の露店行きのジープニーが配備
 されているのだろう。ジープニーのオーナーは「コルド
 ヴァ公設市場での需要があるから、ビジネスとして悪く
 ない状態だ」と著者に述べたが、野菜の販売と供給はコ
 ルドヴァにとって不可欠であり、そもそも野菜が生育し
 にくい生態環境であることを再確認しておきたい。

次に、果物売りの女性 SN 氏（55 歳）の事例を確認
 しておきたい（表 9）。SN 氏は果物を専門に扱う。果物
 もカルボン市場周辺の露店で仕入れが行われるが、SN
 氏の仕入れの詳細については不明である。彼女は 8 種
 類の果物を商っているが、ほとんどを箱単位で仕入れ、
 kg 単位、個単位で販売する。箱の中の果物の重量につ
 いては不明だが、パイナップル、アボカド、マンゴー
 の仕入れ価格と販売価格の差と同程度とすると 15～
 65% 増しと推測できる。

以上、野菜は流通のシステム上、高価となり、利用客
 の購入と摂取は最低限に控えられると考えられる。その
 結果、K 集落の人びとに見られるよう、小型の農産物か
 つ個単位で安く買えるものが調理に基本的な農産物とし
 て日常的に利用されるのであろう。もちろん、より高値
 の農産物を買える層の人びとの存在を捨象してはならな
 い。しかし、公設市場は購買力のある人びとをより対象
 としているのではなく、K 集落の人びとのような貧しい

表 9 コルドヴァ公設市場の果物売り女性 SN 氏の果物
 の仕入れ価格と販売価格（著者作成）

和名	方名	仕入価格 (ペソ)	仕入 単位	販売価格 (ペソ)	販売 単位
パイナップル	<i>pinya</i>	15	個	25	個
アボカド	<i>abokado</i>	35	kg	50	kg
マンゴー	<i>mangga</i>	60	kg	70	kg
ランブータン	<i>lambutan</i>	600	箱	50	kg
マンゴスチン	<i>mangostin</i>	1,000	箱	50	kg
バナナ	<i>saging</i>	1,100	箱	45	kg
リンゴ	<i>mansanas</i>	1,400	箱	12	個
ミカン	<i>dalandan</i>	850	箱	15	個

層にも向けて解放された商取引の場であることを指摘し
 ておきたい。

3-4. 穀類について

穀類は、市場の雑貨屋と米屋、そして市場周辺の米屋
 で売買されている（写真 12）。穀類はセブ本島をはじめ
 フィリピン各地、そして外国産穀類も、セブ市内の加工
 工場や商社に集積される。そのネットワークについては
 現時点では不明であるが、卸売り業者が中に入り、市場
 や米屋に運ばれる。コルドヴァにも穀類の流通で財を成
 した卸売り業者が確認できる。コルドヴァの公設市場で
 は、米屋は卸売業者から穀類を買い、雑貨屋はカルボン
 市場やラプラプ市場で仕入れる。

コルドヴァの公設市場では少なくとも 69 種類の穀類
 が売買されていることが判明した（表 10）。米類 65 種類、
 トウモロコシ 4 種類である。米は、4 種類におおよそ区
 分でき、1) *sinadomeng* (22 種類)、2) *denorado* (7 種類)、
 3) *pilit* (3 種類)、4) *ganador* (2 種類) であり、いず
 れの範疇に属するか不明なものが 34 種類確認できた。
Pilit はもち米であるが、ほかの 3 の範疇が、品種名を
 指すのか、ブランド名を指すのかは不明である。これ
 らの範疇はまた絶対的なものではなく、*sinadomeng* に
 含まれるべき種類が *denorado* に、*ganador* に含まれるべ
 き種類が *sinadomeng* に包括されている事例もある。下
 位分類があるはずだが、同一の店舗で価格が異なる複数
 の *sinadomeng* や *denorado* が売られているのも確認した。
 本稿では明らかな齟齬があるものを除き、妥当と思われ
 る範囲で掲載した。

米の名称は多彩である。本稿では名称の分析に深く立
 ち入らないが、産地、動植物名、希望などプラスの希望
 目標を記したもので様々である。産地については、ビ
 サヤ地域では、ボホール、レイテ、オルモック産とされ
 る米が確認できる。*Local Rice* という名称の米もあるが、
 どこを起点に *local* であるのか不明であり、セブ島産の
 米かどうか判断しかねる。そのほかの地域では、ミンダ
 ナオ島のサンボアンガ、ダバオ、ディゴス、そしてパ
 ラワン島、マニラの名のついた米が確認できた。*Mount
 Fuji* という日本をイメージさせる銘柄もあり、米の名づ
 けと価値が一致するのかどうかあやしい。地名以外でも、
 ビールの *Asahi Premium* や、人気テレビ番組であった
Wowowe と名づけられた米があるなど、流通と品質の背
 景がぼやかされている命名が目につく。公設市場で米を
 売る人びとは、米袋の表示どおり販売しているが、独自
 に目立つような売り文句を書き加えている店舗もある。

米の値段は安いもので 1kg あたり 32 ペソから購入
 できるが、味や匂いが良くないとの評価がある。平均

表 10 コルドヴァ公設市場で確認された穀類の名称と値段(著者作成)

	米の名称	雑貨屋の値段平均 (ペソ/kg)	米屋の値段平均 (ペソ/kg)
Sinandomeng	Amazon	-	38
	Best Farmer	-	36.5
	Cherry Brand	-	39
	Davao Rice	-	40
	Dragon Heart	38	40
	Friendship	41	40.2
	Ganador	50	-
	Liberty	-	32
	Lion Ivory	45.6	45
	Mt. Fuji	-	38.5
	New Horizon	-	44
	Plain Blue	36	35
	Premium Rice	37	44
	Rainbow Sky	38	-
	Rice Vally	-	38.5
	Sechin	-	37.6
	Sinandomeng 1	42	-
	Sinandomeng 2	40	-
	Sinandomeng 3	44	-
	White Rose	46	40.5
Wowowe	-	39.5	
Young Crow	44	-	
Denorado	Chief Choice	42	41
	Denorado 1	45	-
	Denorado 2	47	-
	Dona Conchita	42	42.6
	Excellent Manila	-	42
	Excellent Yellow	-	33
Wowowe	-	40.3	
Pilit	Pilit	51.5	50
	Pure Pilit 1	-	60
	Pure Pilit 2	50	-
Ganador	Ganador	49	48
	Ganador Broken	34.7	34
不明	Asahi Premium	-	37
	Bohol Rice	34	32.5
	Bouquet	-	41
	Bro Brand Premium	-	39
	Champion	46	38.2
	Classic Rice	33	-
	Digos Rice	-	43
	Empel's Choice	-	40
	Five Star	36	-
	Four Season	-	40.3
	Jam White	-	32
	Jegan Rice	35	-
	JRM	33	-
	Leyte Rice	38	43.2
	Local Rice	-	44.2
	Lotus	35	-
	Magic Star	-	42
	Mercy Rice	-	42
	Mindanao Rice	-	42.7
	Monkey King	-	40
	Ormoc Rice	-	43.2
	Pagasa	-	42
	Palawan Rice	-	36.5
	Plain White	-	32
	Pure Harvest	-	38.5
	RC Yellow	35	-
	RPG Ilo-Ilo Rice	34.6	34
Sun Rice	35	-	
White Crystal	38	-	
WMR	35	-	
Zamboanga Rice	-	41.5	
トウモロコシ	Mais	32	32
	Mais #14	31	32.3
	Mais #16	32.6	32.2
	Yellow Corn	-	26

的価格は 1kg あたり 40 ペソ程度である。sinadomeng、denorado、ganador に顕著な価格の違いは認められない。高いものは 1kg あたり 60 ペソに達するが、もち米である。米を買う余裕がない場合、安価なトウモロコシが購入される。政府配給米は毎週土曜日に 1kg あたり 28 ペソ程度で売られるが、原則 1 人 1 回 1kg しか購入できないという。

雑貨屋では、5～12 種類の米が売られているのを 7 店で確認した。平均では 7 種ほどの米が扱われている。一方で、米屋では 11～30 種類の米が 5 店で売られているのを確認した。平均して 20 種程度の米が販売されており、米屋の方が品揃えの良いたことが伺える。また、米屋では米袋が積まれており、量的にも雑貨屋をしのいでいる。米の値段については、雑貨屋も米屋も大きな違いは確認できない。儲けは米の種類や店舗の戦略により一様ではないが、1 袋 2,000 ペソで購入した場合、儲けは 150 ペソ程度であるという。コルドヴァ公設市場内とその周辺に米を売る店舗は 12 店舗ほどあり、競合関係にあることから 1 人勝ちするような儲けは期待できないようである。ただ、卸売業者はその邸構え、商態、人びとの話から盤石に利益を上げていることが伺われる。卸売業者の実態と公設市場で米を売る人びとの関係性だけでなく、フィリピン国内の米の流通構造の解明など今後の大きな課題である。

4. まとめと考察

以上、本稿ではセブ州マクタン島コルドヴァの農産物の流通の実態について報告してきた。本稿は公設市場の農産物売りの農産物の売買行動、市場での人とモノとの関係性について解明することを期した。しかし、実際には、農産物売りの人びとの全体性の把握と個々の生活誌、農産物の多様性と経済性、売買行動の人間関係といった根本的な情報について断片的な調査結果となっており、本稿では具体的に明らかにすることができなかった。ほかにも問題があるかと思われるが、今回の調査以降の重要課題が明確となった。以下、本稿のまとめを行い、結果について考察する。

コルドヴァでは公設市場に農産物が並ぶが、農産物の栽培が行われていない、貧しい地区の人びとは野菜をほとんど摂取できていない、という状態が本稿の問題意識である。コルドヴァは漁獲が盛んに行われているが、きわだった石灰岩土壌であり、農産物は生育しにくい。貧しい小規模漁民たちは、漁獲を魚介類以外の食料に交換することを望むが、大家族分の米、既製品のおかず、嗜好品、子どもの学費や小遣い、光熱費、そのほか

雑費などで1日の稼ぎが飛んでしまう。調査地であるK集落の人びとの家計経済の全体を示すことは本稿では叶わないが、統計資料(Municipality of Cordova 2004, National Statistics Office 2004)で示されたよう出費が収入を上回る傾向にあるのは確かである。彼らは安価な既製品のおかずを頻繁に購入するが、その中にごく少量の農産物が含まれている程度である。農産物を購入することもあるが、販売単位の小さいニンニク、ショウガ、トマト、タマネギ、トウガラシがほとんどである。たまに、市場の野菜部門の清掃を手伝い、野菜売りから野菜クズを入手する。本稿では、貧しい位置にいる人びとの農産物の購買と摂取が少ないことを強調したが、豊かな世帯でも同様の事例が確認できる可能性が否定できない。しかし、一般性より、問題点を記述することの方が重要であるとの立場から、本稿では農産物の購買と摂取が現実的に困難な貧しい層の人びとと農産物との関係に着目した。

農産物はまったく栽培されていないわけではない。家屋の脇で小さな家庭菜園で農産物を育てる者もいるが、日常的な食事や栄養には不十分である。人びとは農産物の代わりに、自生や半栽培の植物を利用する。タマリンド、ココヤシ、バナナをはじめ20種の植物を確認した。いずれも食用にされるものばかりである。人びとが頻繁に利用しているのはワサビノキの葉っぱである。ワサビノキは栄養価に富み、干ばつにも強い。人びとがワサビノキの栄養価について積極的に言及することはないが、古くからの在来知が作用しているのかも知れない。人びとは農産物の不足を、このような自生および半栽培の植物で補っていると考えられる。日常的に人びとが購入するニンニク、ショウガ、トマト、タマネギ、トウガラシといった農産物には薬効も認められている。

K集落の住民の平均世帯人数は4.8人であり、フィリピン全体平均の4.6人を上回る。就業形態は、漁撈、日雇い労働、公設市場での魚・貝売り、トリシカッド・トライシクル運転手、製造業が目立つ。漁撈で捕った魚や貝を市場で売るのが基本だが、状況に応じて日雇い労働に従事する。あるいは、無職となる。1日の法定最低賃金は約350ペソ(約月収7,000ペソ)だが、それ以下のケースもある。一方、製造業では、月収11,000~27,000ほどであるが、家族や親族を扶助するために用いられることから貧困から逃れられるわけではない。1日350ペソ程度の収入では、支出が収入を上回することは前述した。人びとの具体的な農産物の購買行動についてデータはないが、製造業に従事する成員がいる世帯でも農産物が十分に購入できない状況にある。そのような

世帯の成員が、野菜クズを得るため勤んで市場の清掃をしている。

K集落と公設市場の地理的距離はきわめて近い。しかし、人びとは農産物にアクセスしづらい。人びとの食行動を観察していると、よほどのことがない限り米は購入する。それに、魚介類や既製品のおかずが組み合わさる。農産物の摂取はごくわずかである。女性を対象にした栄養調査の結果、そもそも摂取カロリー自体が1日あたりの理想的指数2,000kcalを大きく下回る結果となった。農産物については、15~33kcal程度に過ぎず、ほとんど摂取できていないことが明白となった。漁村という環境上、魚介類の摂取は何とか足りているが、それ以外の栄養は不足している傾向にある。食物の地域外供給率は90%前後であり、魚介類以外は供給できていない。農産物は外部に依存しており、人びとが手近で気軽に利用できるものではない性質のものである。

公設市場は、鮮魚、野菜、果物、精肉の生鮮部門と、雑貨、穀類などの生活必需品部門に大きく分かれる。常に人ごみで活気があるのは前者である。市場にはブースや店舗が設けられ、役場から使用料が課せられる。専用の売り場を持たない売り子は、使用料を納め、地べたなどで商売をする。生鮮部門にはパシル市場やカルボン市場などセブ本島から運ばれた鮮魚、野菜、果物が並び、地場の海産物も一角を占めている。精肉もセブ本島から運ばれる。市場は毎日開かれており、夕食前の時間帯17時半頃に人びとが多く集う。市場の周辺は、市場の利用者を見込んだ食堂やカラオケなど人びとに必要とされる店舗が囲んでいる。市場では、g単位や個単位で商品が売買される。Davis(1973)が指摘したように、購買力のない者でも市場での売買に参入できるような仕組みが成立している。スキ関係についてはその存在について確認したが、スキ関係による人びとの結束や問題点などについての具体は解明できていない。

農産物の仕入れは、深夜に行われていることが明らかとなった。専用のジープニーで隊商を組み、人びとはセブ本島まで仕入れに出かける。農産物の仕入れは、人びとの語りからもカルボン市場で行われると思われたが、追跡調査の結果、カルボン市場周辺の繁華街の通りの脇に列をなす露店から仕入れることが判明した。こちらの方が、カルボン市場で仕入れるより安く、人びとは明け方まで農産物の仕入れに勤しむ。農産物の販売と同様、仕入れもほぼ女性の仕事であることがわかった。誰でも農産物売りができるのではなく、市場使用料、仕入れの交通費、農産物の仕入れ代金など資本がなくてはならない。GPS調査の結果、コルドヴァをはじめマクタン島の

農産物売りなどの人びとは、カルボン市場周辺の繁華街の露店に依存していることが伺われた。

農産物の値段は、産地から様々な段階を経て、多様な人びとを介して運ばれることから、値段は上乘せされる。コルドヴァに農産物が到着した頃には、農産物の値段が生産地の卸値を破格に上回っていることは確かであろう。コルドヴァでは、カルボン市場周辺の繁華街で仕入れた野菜や果物が25～250%増しの高値で売られていることが判明した。農産物売りは少しでも安い農産物を求めて、深夜の厳しい農産物の仕入れを行うが、それは少しでも他者に差をつけ利益を上げようとする戦略である。農産物売りが成立するのは、もちろん農産物に需要があるからであるが、K集落のような購買力の弱い人びとにも農産物を供給する責務が期待されていると考えられる。K集落の人びとにとって、農産物は調理の味つけになる程度の少量のものを除いて、購入するのが敬遠される傾向にあると思われる。むしろ穀類の基本的摂取に価値が置かれる。

穀類は、おかば、もち米、トウモロコシに分けられる。公設市場の非生鮮部門の店舗および市場周辺の店舗で売られている。公設市場では調味料などの雑貨と穀類を扱う店舗と穀類のみを扱う店舗が区別される。両者の違いは、穀類の仕入れ方の違いである。前者はカルボン市場（野菜売りと同様、市場周辺の繁華街の露店であるかも知れない）、時にはマクタン島の中心のラプラプ市場で仕入れるという。後者は、卸売り業者から米袋単位で直接仕入れる。両者の売り値には顕著な差は認められなかった。穀類は69種類のブランドを確認した。ブランド名は産地を表すものが確認できる一方、多くは恣意的と思える命名であった。

ここでコルドヴァにおける農産物の流通について、問題となっている農産物の不足と人びとの対応について若干の考察を行い、本稿を締めくくりたい。コルドヴァの土壌が石灰岩質で農産物の栽培に適していないことが、本地域で農産物が不足する大きな要因である。地域での農産物の不足は、公設市場の農産物売りの仕入れの努力によって埋め合わされている。問題は、農産物の値段が高値となり、誰もがアクセスできないところにある。特に、K集落の小規模漁民社会では、漁撈で得た産物で穀類を入手することはおおそ達成できているが、農産物の十分な獲得と摂取には至っていない。商品を生産する側と買い取る側は、パトロン＝クライアント関係やスキ関係によって結ばれ、経済力によって階層化されていることから、漁民は弱者の地位に置かれてきた（秋道2013）。よって、農産物売りと関係が構築できていない

場合や、関係が希薄な場合、農産物を安価に融通してもらうことが成り立ちにくいと考えられる。たいていの場合、信用貸して農産物を供与することで、両者のスキ関係は強化され、漁民は農産物売りに対し従属化していく。K集落の漁民世帯の構成員が、夜から深夜にかけ、公設市場の農産物売りの部門を清掃し、クズ野菜や小額の現金を受け取るのもスキ関係の反映であろう。ここでは漁撈と農業の間に互酬的な関係が成立していない。農産物売りを農業と結びつけるのは間違いで、彼らは資本を持った商人であると考えの方が現実的に即している。コルドヴァのような生態環境では、純粋な農民はそもそも存在しない。漁民と商人の間では互酬性が成り立ちにくく、スキ関係といった後者に有利なシステムが構築されていることは先行研究が明らかにしてきた問題である。よって、K集落の漁民が農産物にアクセスしづらいのは、農産物売りにとってスキ関係を築く対象とみなされておらず、資本を投下すべく便益がないと考えられているからであろうと考えられる。

農産物の流通は、農産物の乏しい所に農産物を運ぶことに、社会的かつ経済的な意味がある。コルドヴァでは農産物の需要は高く、農産物の流通をめぐる様々なアクターが存在する。農産物売りがその代表だが、カルボン市場周辺繁華街への農産物の仕入れに使うジープニー業者、繁華街の農産物の露天商が少なくともコルドヴァへの農産物供給に直接関わっている。さらに、生産地からカルボン市場周辺繁華街までの流通を含めると、相当の人のネットワークがかさんでいることが推測できる。農産物売りと露天商の間においてもスキ関係が構築されている可能性がある。コルドヴァの農産物売りが露天商から農産物を仕入れる場合、ほかの市場よりは安価であるかも知れないが、露天商とのスキ関係においては必ずしもそうとは限らないとも考えられる。農産物売りは、農産物不足の地コルドヴァにできる限り安く農産物をもたらそうとする反面、できる限り高く売ろうとする力学も働いている。農産物の仕入れは、重労働であり、身を削る側面もあり、運搬を除くと、女性が主に従事する。労働対価がある程度農産物の値段に反映されるのは自然である。農産物の値段は高いが、それは明らかに流通の複雑性と労働投下量の現れである。儲けを出すことが農産物売りには求められる。大きな値引きはスキ関係者に行われないと考えられる。世帯への農産物の流通の多寡は、世帯の経済レベルと関係することがほぼ明らかである。K集落では、料理の味つけに用いる小野菜、既製品のおかずに入った少量の農産物しか流通していない。集落の人びとはそれ以上の農産物のネットワークに乗れ

ずにいる。

以上、農産物の不足と流通の問題は、社会資源としてのネットワークの不全と大きく関係している。コルドヴァ公設市場の農産物売りは相当の労力をかけて農産物の仕入れを行う。それに対して、K集落の小規模漁民は農産物を十分に購入する経済的余裕がない。つまり、農産物売りにとって、好ましい客ではない。また、野菜クズ欲しさに、市場の清掃を引き受ける立場の低い人びとである。このような人びとを相手にすることは、農産物売り自らの戦略を成り立たなくし、危機に陥るかも知れない。農産物をツケで所望され、代金が回収できなくなり、農産物売りの生計だけでなく社会関係にも影響しかねない。物売りは計算高くなくてはならない。スキ制度はその一側面であろう。一方の漁民もまた、農産物の不足について、自生や半栽培の植物で補い対応している。彼らが利用する植物のほとんどに栄養価値と薬用価値がある。農産物が不足しているので仕方なくこれらの植物を利用しているとみなされるかも知れない。彼らの語りには現れないが、自生や半栽培の植物は古くから在来知に基づき利用されてきたと強く考えられる。農産物をそれほど摂取しなくても、K集落の人びとの中には健康な人もいる。地域や個体の状態によるが、農産物を購入・摂取できなくとも、ある程度人間は健康に生きていけるのではないかという問題も浮かび上がった。今後、これらの問題についても明らかにしつつ、コルドヴァ公設市場の農産物売りに焦点を当てた市場研究を行い、市場の構造と機能の全体像を解明することが本稿以降の課題である。

謝辞

本稿は、平成26年度科学研究費補助金基盤(A)「乳文化の視座からの牧畜論考—全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」(代表者:平田昌弘)の成果の一部である。調査では、特に食事調査において、AMおよびJM夫妻から多大な協力を得た。公設市場の商人の方々や、他地域から野菜や魚介類を運搬するジープニー業の方々からも支援を得た。ただ、著者がマクタン島で調査を開始して以来、ずっと息子のように面倒を見てくださったホシムシ採集の名人Magdalena Aro氏が2015年7月31日からの調査の間近に亡くなられた。本稿をAro氏に捧げたい。

注

(1) スキ(suki)とは、パトロン=クライアント関係に近い人間関係の紐帯で、上位者は下位者に金銭などの庇護を行い、下位者

は金品などの無心をすることで結ばれている。結果、上位者は下位者に対し優位に立ち、下位者は上位者に従属的になる。関係の濃淡や強弱については当事者間の事情によるが、フィリピン各地で確認できる文化的かつ社会経済的事象である。

(2) 干潮時の干潟では、日常的な光景として、貝を中心とする食用魚介類を採捕する人びとでにぎわう(辻 2007b)。

(3) 1999年から2004年まではDinagat Festival、それ以降はBakasi Festivalと呼ばれてきた(辻 2007)。最近になり、再びDinagat Festivalという呼称が使われている。Dinagat—Bakasi Festivalは役場資料(Municipality of Cordova 2014)の記述に基づくが、混乱を避けるため列記されていると思われる。

(4) 魚類については、魚売りがパシル市場などに買い出しに行く以外に、午後にトラックで外部から魚が運ばれてくるのを確認した。おそらく、スキ関係で結びついた卸売り業者か仲買人によるものと推測される。

(5) ワサビノキの葉っぱを野菜として利用する慣行は、フィリピンのほか、マレーシアとインドで確認できる(Quisumbing 1978)。

(6) 調査当時の為替レートは、1ペソ=約2.7円であった。

(7) フィリピンでは、月収59,999ペソ以下の世帯の支出は収入を上回る赤字傾向であることが示されている(National Statistics Office 2014)。

(8) フィリピンには、日本の中学校に相当する教育制度がない。小学校の次が高等学校である。小学校は6年制、高等学校は4年制である。

(9) 世帯調査の方法によって世帯人数のデータの信頼性は変わってくるが、本稿では厳密な分析は行えず、利用できる資料の記述に委ねる。

(10) トリシカッドは自転車の側面に荷台をつけた乗り物で、トライシクルは250cc程度のバイクの側面に荷台をつけた乗り物である。トリシカッドは人力でガソリン代がかからないが、長距離の移動に適していない。トライシクルの移動範囲は、せいぜいマクタン島の中心ラプラブ市内までである。

(11) 政府の国家健康計画(National Health Plan)では、フィリピン国民のカロリー平均摂取量について、1995年の1,913 kcalから、2000年には2,000 kcalへの向上が目指された(Florencio 2004)。一方で、2009年のデータとして、2,580 kcalという大きく異なる数値も確認できる(香川編 2014)。

(12) K集落では洗濯機は普及しておらず、洗濯板を使った手洗いが一般的である。洗濯機は5,000ペソほどの安価なものが販売されており、近い将来、洗濯の様子は変化するかも知れない。

(13) 2015年8月、聖人(San Roque)を祀る祭り(Fiesta)がコルドヴァで行われた。祀る対象や行事には地域性が見られる。このような機会には、親族だけでなく近所の人びとも、豪華な料理でもてなさなくてはならない。そのような経済的余裕はJMの世帯には決してないが、それでも行うべきだと主張し、実姉から借金をした。

(14) 日本の一般的な消費者金融では出資法により29.2%が金利の上限であるが、本稿のケースの場合、月利20%で借金が行われていた。金利に直すと240%ほどに相当する。

(15) 家畜は、ブタ、ヤギ、ウシ、ニワトリが確認できるが、ニワトリ以外、ごく少数である。ニワトリはほとんど鬮鶏目的で飼養されており、食用ではないという。家畜飼養については、別稿で詳細を論じた(辻 2016)。

(16) 嗜好品でも、タバコや酒の場合、所得の低い層の方が支出に占める割合が高い(National Statistics Office 2014)。

- (17) マクロなレベルの食物への支出割合については National Statistics Office (2014) を参照願いたい。
- (18) 2005 年、タイからの米の輸入が滞り、米が手に入らない事態が生じた。コルドヴァの公設市場には深夜から大量の人びとが政府配給米を待ち大行列を作った。
- (19) 加工の際などに余った野菜クズは数種類まとめて袋詰めにして売られる。1 袋 10 ~ 20 ペソ程度。野菜の種類は一定ではないが、ハヤトウリ、カボチャ、キャベツ、オクラ、ナス、ジュウロクササゲなどが挙げられる。クズ野菜目当てに公設市場の清掃を手伝う人も少なくない。中には、専属状態の清掃人も 6 人程度おり、市場が閉じると清掃を開始し、夜中の 3 時頃まで警備の役を担う。お返しに野菜や 50 ペソ程度の現金をもらう。
- (20) 簡易的な血圧検査を実施した。明らかに自分は高血圧や糖尿病だと言う人びとの血圧は確かに高血圧であった。しかし、高血圧が野菜の不足だけによるものかは不確かであり、調味料、嗜好品、生活習慣などとの連関から調査されねばならない。高血圧や糖尿病の問題は K 集落のミクロな現象でなく、フィリピン全体におけるマクロな現象であることを確認しておきたい。
- (21) 軽トラックに乗客用の荷台をつけたモーティカブ (*multi cab*) やシャトル (*shuttle*) と呼ばれるバンなど、公共の自動車は市場に乗り入ることは規制されている。これらの乗り物は、町の主要な道路に専用のターミナルがある。
- (22) ここでの魚介類とは、魚類、貝類、カニなどの甲殻類、ナマコやウニなど棘皮類、テングサなど海藻類を指す。
- (23) コルドヴァでも、K 集落の近くで、地主が養豚場を営んでいるが、流通先については確認できていない。
- (24) 近年では、バンが、セブ市内の主要地域とコルドヴァを結んでいる。ジープニーは大型の荷物を運搬することが可能だが、モーティカブやバンでは人を運ぶことが優先される。
- (25) セブ州では、少なくとも 78 種の作物が栽培されている (National Statistics Office 2004, 2006)。
- (26) なぜ、深夜の露店の農産物が安いのかは明らかにできていない。市場ではなく露店で売ることによって経費を下げる、流通の過程で多重にかかる人件費を削減する、などの理由が考えられる。穿った見方として、鮮度が劣る農産物が値を下げて売られているのかも知れない。
- (27) セブ州の主要作物は、トウモロコシ、サトウキビ、マンゴー、バナナ、ブランテンバナナ、キャベツ、サツマイモ、キャッサバ、ナスビ、リョクトウ、ピーナッツ、トマト、タバコである (Bureau of Agricultural Statistics 2013, Philippine Statistics Authority 2014)。
- (28) ニンニクは高血圧、タマネギは駆虫、健胃、強壮、下痢、コレラ、痛み、無月経、ショウガは健胃、興奮剤、トウガラシは腸チフス、水腫、痛風、消化不良、コレラなどに効用がある。トマトは、リン、ビタミン A・B・C を豊富に含む (Quisumbing 1978)。
- (29) 2015 年になり、コルドヴァの公設市場に公定の秤が設置された。商品の重量の多寡をめぐりいさかいが存在するのであろう。
- (30) 実際に目分量および感覚で農産物を束にして売っているのではなく、長年の農産物売りとしての経験が身体化し、精度の高い秤になっていると考えられる。あるいは、消費者が納得できる量の束を販売しているのかも知れない。
- (31) Abuyen (1994) によると *ganador* は「勝者」の意である。

参考文献

秋道智彌 2013 『海に生きる - 海人の人類学』東京大学出版会
 Abuyen, T. 1994. *Dikshionario Watay-Waray (Visaya) : English-*

- Tagalog*. 出版社不明。
- Brown, W. (eds.). 1921. *Minor Products of Philippine Forests, vol. 1*. Manila: Bureau of Printing.
- Bureau of Agricultural Statistics. 2013. *Major Crops Statistics of the Philippines 2008-2012 (Regional and Provincial)*. Quezon City: Bureau of Agricultural Statistics.
- Davis, W. 1973. *Social Relations on a Philippine Market-Self-Interest and Subjectivity*. Berkeley: University of California Press.
- Fenner, B. 1985. *Cebu under the Spanish Flag (1521-1896) : An Economic and Social History*. Cebu City: San Carlos Publications.
- Florencio, F. 2004. *Nutrition in the Philippines: The Past for its Template, Red for its Color*. Quezon City: The University of the Philippines Press.
- Garong, A. 2013. *Ancient Filipino Diet: Reconstructing Diet from Human Remains Evacuated in the Philippines*. Cebu City: University of San Carlos University.
- 香川芳子編 2014 『食品成分表 2014』女子栄養大学出版部
- Kawada, M. 1994. Public Market in Bantayan: Social Ties in Local Economic Activities. In Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 1994. *Fishers of the Visayas: Visayans Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press, pp.203-231.
- Kobayashi, T. 2000. Selling Fish in the Market of Capiz. In Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 2000. *Bisayan Knowledge Movement & Identity: Visayan Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press, pp.203-222.
- Municipality of Cordova. 2004. *Municipality of Cordova Comprehensive Municipal Profile: including Plans, Programs, and Accomplishments Province*. Cebu: Municipality of Cordova.
- Municipality of Cordova. 2010. *Municipality of Cordova, Cebu Province: Socio-Economic Profile*. Cebu: Municipality of Cordova.
- Municipality of Cordova. 2014. *Municipality of Cordova, Cebu Province: Ecological Profile*. Cebu: Municipality of Cordova.
- National Statistics Office. 2004. *2002 Census of Agriculture: Central Visayas, vol.1*. Manila: National Statistics Office.
- National Statistics Office. 2006. *2002 Census of Agriculture: Central Visayas, vol.2*. Manila: National Statistics Office.
- National Statistics Office. 2014. *2012 Family Income and Expenditure Survey*. Manila: National Statistics Office.
- Ogawa, T. 1996. The Kogengaku Approach to the Study of Sari-sari Stores in Victory Island, Eastern Samar. In Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 1996. *Binisaya nga Kinabuhi [Visayan Life]*. Quezon City: UP Press.
- Philippine Statistics Authority. 2014. *Major Crops Statistics of the Philippines 2009-2013 (Regional & Provincial)*. Quezon City: Philippine Statistics Authority.
- Quisumbing, E. 1978. *Medicinal Plants of the Philippines*. Caloocan City: Katha Publishing Co., INC.
- Scott, W. 1992. *Looking for the Prehispanic Filipino*. Quezon City: New Day Publishers.
- 関恒樹 2007 『海域世界の民族誌 - フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』世界思想社
- Spoehr, A. 1980. *Protein from The Sea: Technological Change in Philippine Capture Fisheries*. University of Pittsburgh.
- Szanton, D. 1971. *Estancia in Transition: Economic Growth in a Rural Philippine Community*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

- Tsuji, T. 2013. "The Technique and Ecology Surrounding Moray Fishing - A Case Study of Moray Trap Fishing on Mactan Island, Philippines-". Rintaro Ono, David Addison, Alex Morrison (eds.). *Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Region*. Australian National University Press, pp. 167-181.
- 辻貴志 2007a 「フィリピン・セブ州マクタン島におけるウツボ漁に関する調査ノート」『人間文化』第22号、141-151頁。
- 辻貴志 2007b 「フィリピン・マクタン島沿岸域におけるサルボとタツナミガイの採捕と利用」『日本熱帯生態学会ニューズレター』第68号、6-12頁。
- 辻貴志 2015 「フィリピン・セブ州マクタン島における潜水採貝漁の事例報」『社会情報研究』第14号、63-79頁。
- 辻貴志 2016 「フィリピン沿岸域の生業と生物資源利用における家畜と乳利用の実態」平田昌弘編『公開シンポジウムの記録 家畜化と乳利用 - その地域的特質をふまえて - 搾乳の開始をめぐる谷仮説を手がかりにして』2015年5月16日・17日公開シンポジウム事務局、125-137頁。
- Umali, A.F. 1950. *Guide to the Classification of Fishing Gear in the Philippines*. Washington: United States Government Printing Office.
- Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 1994. *Fishers of the Visayas: Visayans Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press.
- Ushijima, I. and C. Zayas (eds.) 1996. *Binisaya nga Kinabuhi [Visayan Life]*. Quezon City: UP Press.
- Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 2000. *Bisayan Knowledge Movement & Identity: Visayan Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press.
- 吉田よし子・菊池裕子 2001 『東南アジア市場図鑑 - 植物篇』弘文堂
- Zayas, C., Kawada, M. and L. de la Peña. (eds.). 2014. *Visayas and Beyond: Continuing Studies on Subsistence and Belief in the Islands*. Quezon City: UPCIS Publications.



写真 1

コルドヴァの海・ウツボ祭りの様子
(2015年)



写真 2

農耕に適さないコルドヴァの石灰岩土壌
(2015年)



写真 3

山地部（マンタロンゴン）から低地に野菜を運ぶ男性
(2015年)

写真4

山地部（マンタロンゴン）の農
耕
(2015年)



写真5

ワサビノキの葉っぱを使った
スープ
(2015年)



写真6

コルドヴァ公設市場で売られる
ワサビノキの葉っぱ
(2014年・平田昌弘撮影)





写真7

コルドヴァの公設市場正面
(2015年)



写真8

コルドヴァ公設市場で野菜を売る男性
(2015年)



写真9

深夜のカルボン市場周辺の露天
で農産物を売る人びと
(2015年)

写真 10

荷と人を積んだジープニー
(2015年)



写真 11

ネズミに食害されたナスビ
(2015年)



写真 12

コルドヴァ公設市場で売られる
穀類
(2015年)

